書　評

山本博文 監修

『ビジュアル NIPPON　江戸時代』

熟　　美保子

はじめに

表紙に書かれた「絵画史料で読み解く江戸時代270年史」の言葉からも分かるように、本書は図版から江戸時代を通史的に捉えようとしたものである。文字による説明では理解不十分なものでも、視覚化することによって明確になる場合が往々にしてある。歴史学でいうと、古文書や古記録などの文字史料では補えない部分を、ビジュアル史料―画像―によってイメージして理解するということであろう。

絵画史料を用いてこれまでとは違う中世日本の世界を明らかにした黒田日出男氏は、かつて次のように述べた。「(『絵画』を歴史の『史料』として利用することは) 主として『挿絵』ないし『挿絵』的な利用であり、積極的に『絵画』作品と対話し、読解しようとするものではなかった (中略) そのような『絵画史料』の中に、これまで見落とされてきた歴史のビジュアルな諸側面が豊かに広がっているのではないだろうか。(『姿としぐさの中世史』)」江戸時代についても同じように、「絵画史料との対話・読解・分析」が重要となるのは言うまでもない。

今や歴史を語る上で欠かすことのできない存在となった絵画史料を、本書ではおよそ300ページにわたってふんだんに掲載し、江戸時代を屏風や絵巻、錦絵などから読み解いている。もちろん本書は図録ではないので、あくまで通史

的な江戸時代理解をめざす。その証拠に、「第一章　天下泰平への道」は17世紀、「第二章　変革と転換の時代」は18世紀、「第三章　内憂外患から開国へ」は19世紀と、およそ100年ごとに章立てした３部構成になっている。その上で江戸時代の画期となる事件や、産業・文化・芸術・学問・暮らしなどを合計30の項目にわけて解説している。

また、各章の終わりにある「外国人の目から見た『日本』」のコラムによって、外からのまなざしについても確認できるようになっている。とりわけ第三章の終わりでは、かの有名なベアトがとらえた日本の風景写真を紹介している。絵画による近世（江戸時代）から、写真をはじめとする映像の近現代へと「画像史料」という軸でつながっていくのが分かる。

さらに、巻末資料として人物事典、博物館案内なども掲載されており、実際に画像の所蔵先に見に行く事が出来るような工夫もこらされている。

１．絵画があらわす江戸時代

先にも述べたように本書は30の項目が取り上げられているが、紙幅の関係上、ここではいくつかの興味深い項目について言及したい。

①第二章　悪所の成立

まず見出しに掲げられている「悪所」とはどのような場所をさすのだろうか。沖浦和光氏は「悪所」の特徴として、一つ目に色里や遊里、二つ目に芝居町、三つ目として近くに被差別民の集落が存在すると定義している（『「悪所」の民俗誌』）。いつの時代でも人々は現実を忘れ、日常生活から離れられる場所や娯楽を求めるものである。江戸時代とは、「悪所」と呼ばれた歌舞伎などを演じる芝居小屋と遊女屋が集まる遊郭が、時代を下るに従い発展した時代でもあったといえよう。本稿では元禄（1688–1704）ごろから「悪所」と呼ばれるようになった遊郭に焦点をあてる。

この項目ではビジュアル素材の中心として、『吉原風俗図屏風』（ボストン美術館所蔵）が紹介されている。これは18世紀の浮世絵師による六曲一隻の屏風である。江戸北部の郊外に設けられた吉原という大規模な遊郭は、男たちの遊びと息抜きのために幕府から公的に許可された空間で、京都の島原・長崎の丸山とあわせて江戸時代の三大遊郭と称されている。

この屏風では、遊女に言い寄る男性客の様子がまず目をひく。遊女とは遊里という限られた場での仮の妻であり、この中で男性たちは現実の生活と切り離された別の人生、いわゆる「浮世」を存分に愉しんでいた。ただ興味深いことに、花魁道中を見物する人々の中に女性の姿を何人も確認できる。つまり吉原とは男性のためだけでなく、女性にとっても歌舞や料理を堪能する娯楽の空間であったことが分かる。

また丹念に『吉原風俗図屏風』を眺めていると、手紙を書く、仲間同士でゲームを楽しむ、貸本屋の差し出す書物を借りるか思案するなど、仕事から離れた遊女たちの私生活も見てとれる。吉原とは入口が大門のみで、周囲を掘で囲まれた遊興と歓楽に満ちた日常とは違う別世界とイメージされる。しかし屏風からは、実際にそこで生活する彼女たちの息づかいが感じられるようだ。

②第二章　吉宗の政治

この項目では、関西大学図書館所蔵の『象之絵巻物』がビジュアル素材の中心となっている。関西大学には「象関係」の史料が集められているが、東洋史の立場から、近世の日中関係について多くの示唆を与えた故大庭脩氏の尽力が大きいのだろう。

『象之絵巻物』は象が長崎に来航して上京するまでの旅の道中を、５メートルにも及ぶ長さに１カットずつ彩色で描いたものである。この絵巻には川の水を飲む象、象の背中に乗ったベトナムから一緒にやって来た象使いや、道案内をする武士たちなどの様子を見ることができる。

様々な書物や瓦版、版画などが出されるほど、８代将軍徳川吉宗（1684-

1751）による象の輸入は有名な話である。しかし『象之絵巻物』は幕末の画家、緒方探香によって描かれたものである。よって絵巻と実際の状況には時間的なタイムラグがあり、吉宗の時代に渡来した象が忠実に再現されているわけではない。例えばこの絵巻に象は１頭しか描かれていないが、実際には２頭が長崎に上陸した。また、この絵巻は天皇による象の上覧で終わっている。その時の象はいわゆる動物の「おすわり」ではなく、まさに敬意を示すかのように前足までも折りまげた座り方をしている。このような描き方に作者の意図が感じられないだろうか。

ところで豊臣秀吉や徳川家康などは象を献上された立場だが、吉宗は自らの意志で象を求めている。その理由について本書では、「象が見たい」という「キラキラした好奇心」と表現されている。もちろん、それだけではないだろう。巨大な象を輸入できるほどの権力を国内に誇示するという、重要な政治的意味合いもあったと考えられる。

③第三章　災害と飢饉

江戸時代には大地震、噴火、洪水などの自然災害がしばしば発生し、その後には疫病が流行したり飢饉の状態にまで立ち至る場合もあった。安政２年（1855）10月２日、死者7000人以上ともいわれる被害をもたらした大地震が江戸を襲った。この地震は歴史上非常に有名で、全国諸藩の江戸屋敷も被災したため、多数の関連史料が全国各地に残されている。

この項目では『江戸大地震図巻』（東京大学史料編纂所所蔵）が活用されている。発生前の一見平穏ではあるが、怪しい雲行きにどこか異変を感じさせる場面に始まり、地震により一変した町の状況、人々の苦しみや生活回復に向けた復興の様子などが、ストーリー性をもって描かれた絵巻である。

８メートルにも及ぶこの絵巻は、後世に地震の恐怖を伝えている。例えば地震発生直後の部分には、倒壊・延焼した家屋、子供を背負い逃げまどう人々、家屋の下敷きになった人やそれを救助しようとする人、悲しみのあまり泣き崩

『ビジュアルNIPPON　江戸時代』

図　逃げまどう人々
（『ビジュアルNIPPON　江戸時代』228頁より）

れる人など、混乱した状況がリアルに描かれている。その一方で、悲しみの中で犠牲者の遺体を掘り出し埋葬作業を行う姿、避難小屋で風呂を焚いて入浴し、雪だるまに復興を託しながら復旧作業を進める様子など、苦しい中でも生きようとする人々のエネルギーも読み取れる。

ところで『江戸大地震図巻』を見ていると、完膚無きまでに寸断された道路や倒壊した家屋、いくつものぼる黒煙など、1995年１月17日に発生した阪神・淡路大震災がまざまざとよみがえるようだ。この絵巻には図のような着の身着のままの裸足で逃げる人が描かれているが、午前５時46分に発生したあの震災でもこのような光景が見られた。現代を生きる我々と歴史を生きる人々が、まさに「地震」という同じ体験でつながったともいえよう。

２．国際関係はどのように見えるか

本書で江戸時代の対外関係を取り扱っている項目は、「第一章　鎖国と対外貿易」、「第二章　朝鮮通信使」、「第二章　琉球王国の港と船」、「第三章　緊迫

する海防問題」、「第三章　黒船と横浜開港」である。

単純な「江戸時代＝鎖国」というイメージは払拭され、すでに過去のものとなった。長崎における中国・オランダとの関係、対馬と朝鮮の関係、薩摩における中国を背景にした琉球との関係、松前とアイヌの関係という、いわゆる「四つの口」は高校の教科書にもすでに登場する。本書の対外関係の項目で取り上げたビジュアル史料からも、内向きのまなざしだけでなく、拡がりのある江戸時代が眼前に迫ってくるようだ。

だが様々な制約によるのだろうが、対外窓口としての北の視点（アイヌ）では独立した項目がない。「北前船の活躍」の項目では、代表的な輸送品である鰊をイメージするために『江差松前屏風』がとり上げられているが、その中で1カットを示し、「冬支度するアイヌ」とだけ紹介している。だからこそ「琉球王国の港と船」の中で、囲み記事として『蝦夷人昆布採取図』をとり上げ、「北」と「南」をつなぐモノ―昆布―を採るアイヌの姿を解説している点は、非常に意味のあることである。

一方、「鎖国と対外貿易」では寛文期（1661～73）の長崎の町を描いた『寛文長崎図屏風』（長崎歴史文化博物館所蔵）を素材に、まず出島やオランダ船に焦点をあて、次に西役所、諏訪明神、唐寺、丸山遊女街など長崎の主要な場所・施設を拡大して紹介している。

もちろん長崎について述べる場合、日蘭関係と同じく日中関係についても決して見落としてはいけない。寛文期には「唐人屋敷」はまだ設けられていないので、本書では時代が下った19世紀初頭の『唐館図絵巻』（同館所蔵）を素材に、唐船が入港して新地（荷物蔵）に荷揚げするまでを特集記事の形で紹介している。付け加えると、『唐館図絵巻』の魅力はさらにその先にも拡がっている。例えば唐人屋敷の中で音楽に興じる姿や龍踊りの様子など、滞在中の唐人たちの日常生活をここから読み取ることができる。この絵巻は、長崎における江戸時代の国際関係が文化交流の側面もあり、貿易活動のみに終始していたわけではないと教えてくれる。

ところで江戸時代の対外政策を示す用語については、「海禁」などいまだ議論の分かれるところではあるが、読んで字のごとく「国を鎖していた」ととられないように、最近では「鎖国」と「　」付きにしたりする。しかし本書には鎖国と「鎖国」の二種類の表現がある。同一用語の表記については、読者の混乱をまねかないよう何らかの配慮も必要なのではないだろうか。

むすびに

絵画史料から展望した本書によって、実際に生きていた江戸時代の人々をわかりやすく感じることができる。もちろんビジュアルから歴史を見るということは、古文書（文字史料）を読むのと同じく画像史料（絵画・映像）が語るところを解釈しなければ始まらない。このような非文字史料である絵画の読み解き作業には、背景となる情報が必要不可欠であり、やはりそれは古文書などの文字史料から得ることになる。本書には画像をより立体的に解釈するために、項目ごとに見開きで解説がなされている。例えば本稿で取り上げた項目でいえば、「悪所の成立」には「江戸周辺につくられた芝居小屋と遊郭は二大悪所と称された」、「吉宗の政治」には「さまざまな人をブレーンにした吉宗の政治スタイル」、「災害と飢饉」には「繰り返し起きた災害と闘った江戸時代の人々」という見出しで、様々な文献をもとに、グラフなども駆使して解説がなされている。このように画像と文献を併用することによって相乗効果がはたらき、これまで見えてこなかった歴史がより鮮明になるのだろう。

さらに本稿で取り上げた以外にも、『ビジュアルNIPPON　江戸時代』の中には様々な女性の姿が見て取れる。女性同士で舞や音楽を楽しむ様子や、出版物を制作したりかば焼きを売るなど、多様な仕事をしている生活者としての女性の実体が様々な角度から捉えられる。本書を活用することによって、今後の女性史研究にも多くの示唆を投げかけているように思われる。

（小学館、2006年、本文297頁、本体4200円＋税）